

平成三十年十二月投句

初雪に枯山吹の莖緑

P Mの夕焼赤く冬にいる

朝鴟や筑後の盆地霧の中

子供らに囲まれて父蕎麦を掻く

ビオトープ池も畔も冬ざれて

ひっそりと咲きひっそりと菊枯るる

海原も苔も紅葉の散る下に

散紅葉大海原の渦となり

無住寺となりてひとしほ冬紅葉

勝利

手袋に残る形のわが手なり

手袋を脱ぎし母の手やはらかく

吹き曝す玄海の島虎落笛

冬の虹出船の水脈の消ゆるまで

着膨れて流星を待つ十五分

極月の迎賓館へ花鳥の間

光子

節子

由紀子

真理子